

現代大学新生をどう見るか： 大学教育の質保証の観点から

2014年9月26日

於 「学校と社会をつなぐ調査」 分析報告会
山田礼子(同志社大学)

発表の構成

1. 初年次教育と高大接続
2. アメリカの高大接続と教育接続
3. 高大接続の観点 何が異なるか:
日本の学生調査から見る新入生の高校時代の経験, 大学での状況
4. 日本における教育接続の問題点
5. 発表者へのコメント

1. 初年次教育の定着と新たな現象

- ・現状：

初年次教育が学士課程教育のなかで定着

2008年の中教審答申での初年次教育の位置づけ

- ・「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り，学習および人格的な成長に向け，大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく，主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」
- ・「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」

初年次教育をめぐる新たな現象

- 大学と高校の境界の曖昧化
大学生が自らを「生徒」と自己定義
大学を「学校」と呼称

大学の学校化、学生の生徒化（武内等 2008）

初年次教育を大学生への移行を支援する教育
という意味だけではなく、
「高校4年生のための教育」という教育接続の
視点で捉える動向

高大接続をめぐる先行研究

入試・選抜というアプローチ

- ・荒井(2005)入試選抜から教育接続(制度, カリキュラム, 教育方法, 内容面)のシステムへの転換を意図した政策転換を提唱
- ・佐々木(2010)高大接続テストを提唱

高校における生徒文化というアプローチ

- ・武内等(2005,2008,2009)の研究

谷田川(2009)高校時代に「読書」や「受験勉強」といった勉学中心の活動, 「ボランティア」といった奉仕活動に打ち込んだ学生がより「向授業」

黒河内(2009)AO入試学生は高い意欲を持ち, 一般入試学生は受験勉強を通じて学業への意識を高めているが, 読書経験が比較的少なく, 自主的な学業への意識はそれほど高くない

カレッジ・インパクト研究からの知見

- 杉谷(2009) 第一志望校進学者はポジティブ学生に多く、ネガティブ学生は第一志望校以外への進学者に多い傾向
- 山田(2009) 進学理由に関して自己決定力の強い自己決定型の学生はポジティブに学生生活を送り、また、ポジティブな学生は経験を大学での適応に結び付けられる傾向が高い



- 高校時代の経験、自己認識、進学理由、志望順位など高校時代の影響が大学での学習・生活には大きな影響を与える



教育接続という視点の必要性

アメリカの高大接続と教育接続

米国での教育接続制度

◆ 高校生を対象にした高大連携のプログラムの存在

1. AP (Advanced Placement)

近年は米国国内のみならず国境を超えて普及

2. コンカレント・プログラム (Concurrent Program)

個別の大学エクステンションプログラムで主に実施されている。日本の個別大学が実施する高大接続プログラムとも関連性・共通性

AP(アドバンスド プレースメント)とは？

- 高校に在籍しながら大学レベルの授業を受講し、その授業を終了すれば大学レベルでの単位取得を出来るプログラム
- カレッジボードが運営, ETSが実施
- APプログラムを通じて取得した単位は大学入学後に卒業に要する単位として換算

APプログラムの概要

- 1952年開始，現在アメリカ国内の高校
および世界24カ国の高校で利用
- ◆ 科目と試験＝22の学習分野からの34科目と試験高校がAPコース
(選択科目)を開設
- ◆ 高校生はAPコースを受講し，APテストを受験
(APコースを受講しなくても，APテスト受験は可能)
- ◆ 合格後，入学した大学の規定により大学が単位認定することもある
(5段階 3以上が合格)
- ◆ APコースは，高校教師が授業を提供
(教育内容，授業方法の高大接続)

高校生のAP科目履修メリット

- 早期から大学レベルの授業を履修することで早期から大学での学習レベルに慣れることができる
- 作文技能を改善し、問題解決技能を修得することができる
- 高次な大学の授業内容に挑戦することで大学での学習習慣が高校に在籍しながら修得することができる

大学側にとってのAPのメリット

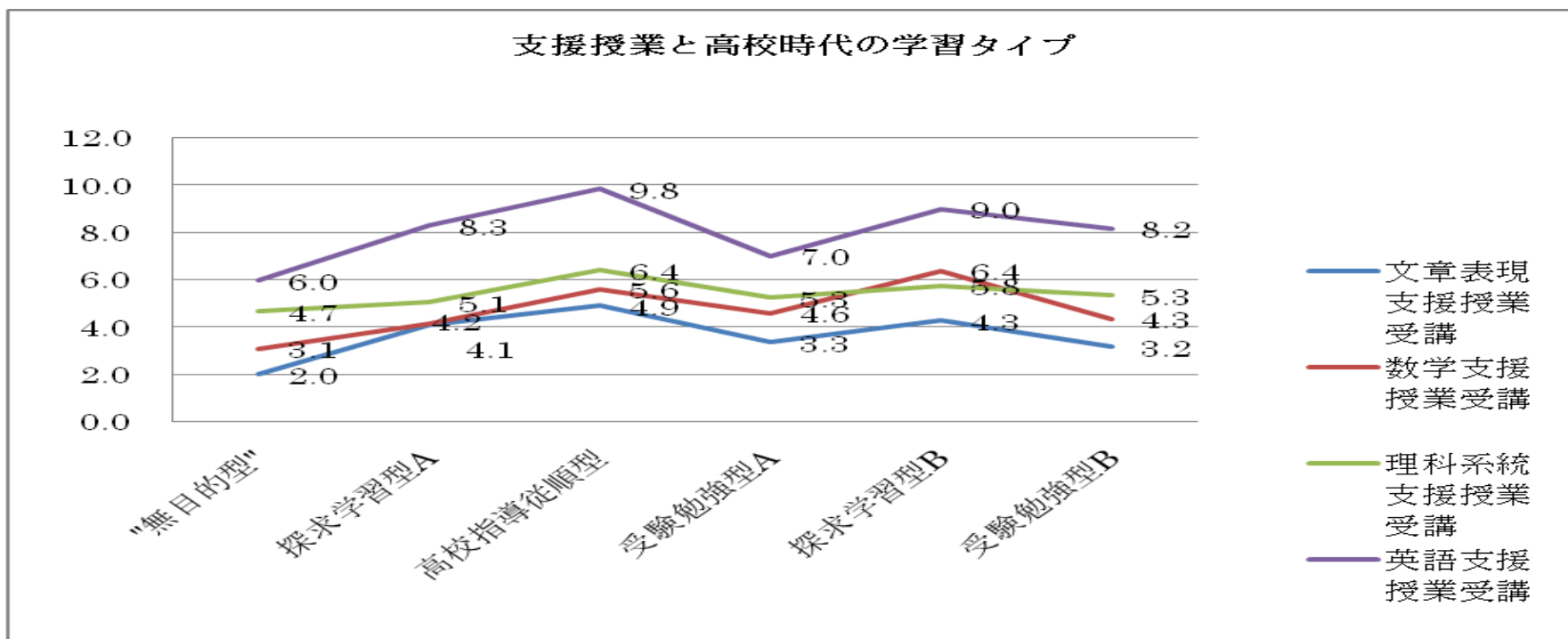
- 入学志願の段階での適性の確認
- 大学での学習への準備が整っていると前向きに評価
- 早期スタートが可能と判断＝高校生でありながら大学レベルの科目を受講し試験に合格することがその生徒が学習上で優れているという証明として機能
- 大学に適応する可能性の高い学生を入学予備軍として確保
- 連邦政府やアクレディテーション団体からリテンション率や卒業率を上げることが厳しく求められている高等教育機関にとっては費用対効果やリスク管理の利点

高大接続の観点 何が異なるか：
日本の学生調査から見る新入生の
高校時代の経験，大学での状況

データの説明

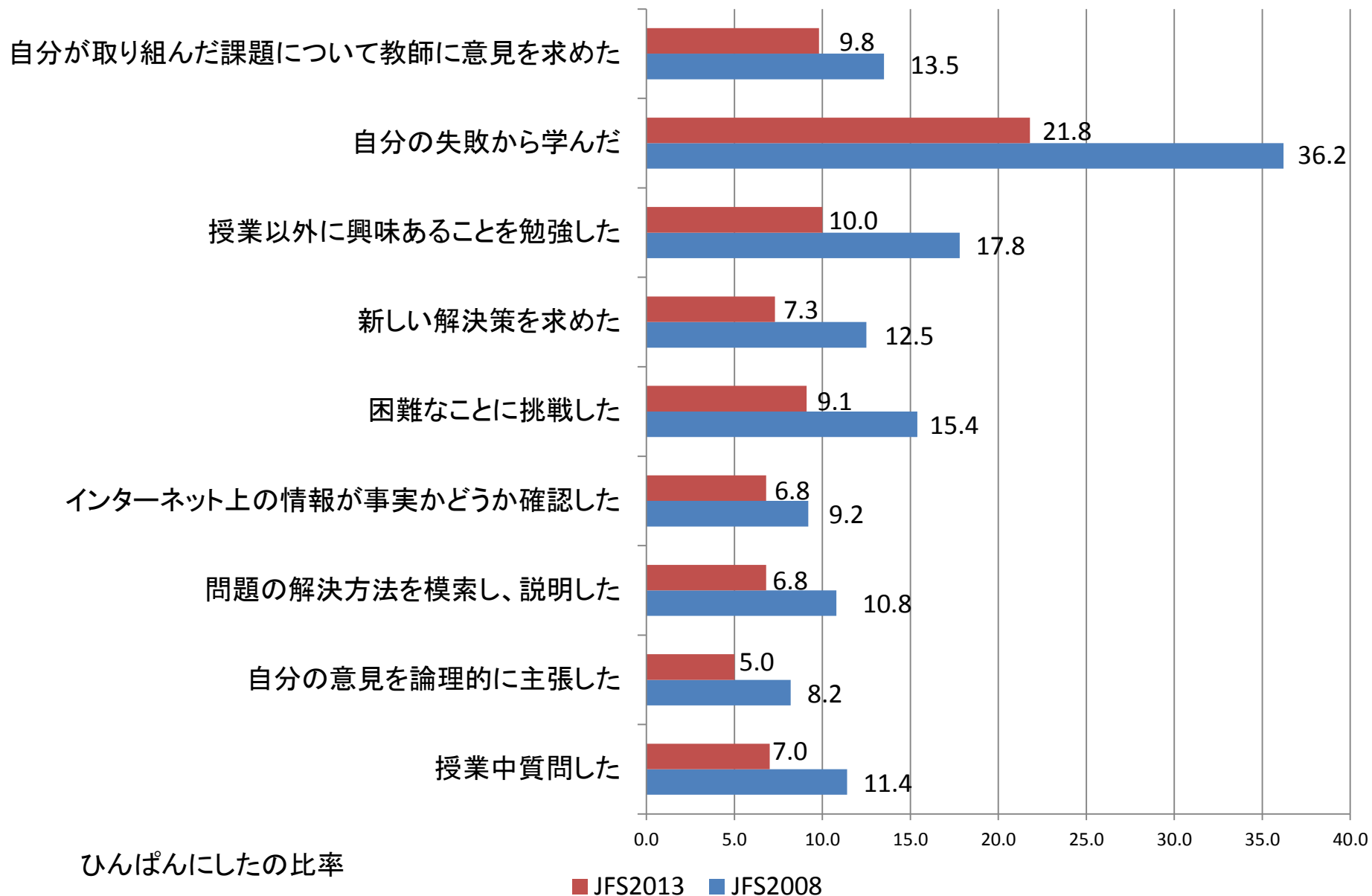
- ジェイサープ(日本版学生調査)データを使用
- JFS(新入生調査)2008とJFS2013
- JFS2008 国立3713名, 公立1078名,
私立14870名 合計19661名
- JFS2013 国立4497名, 公立940名,
私立10082名 合計15519名

補習授業と学生類型



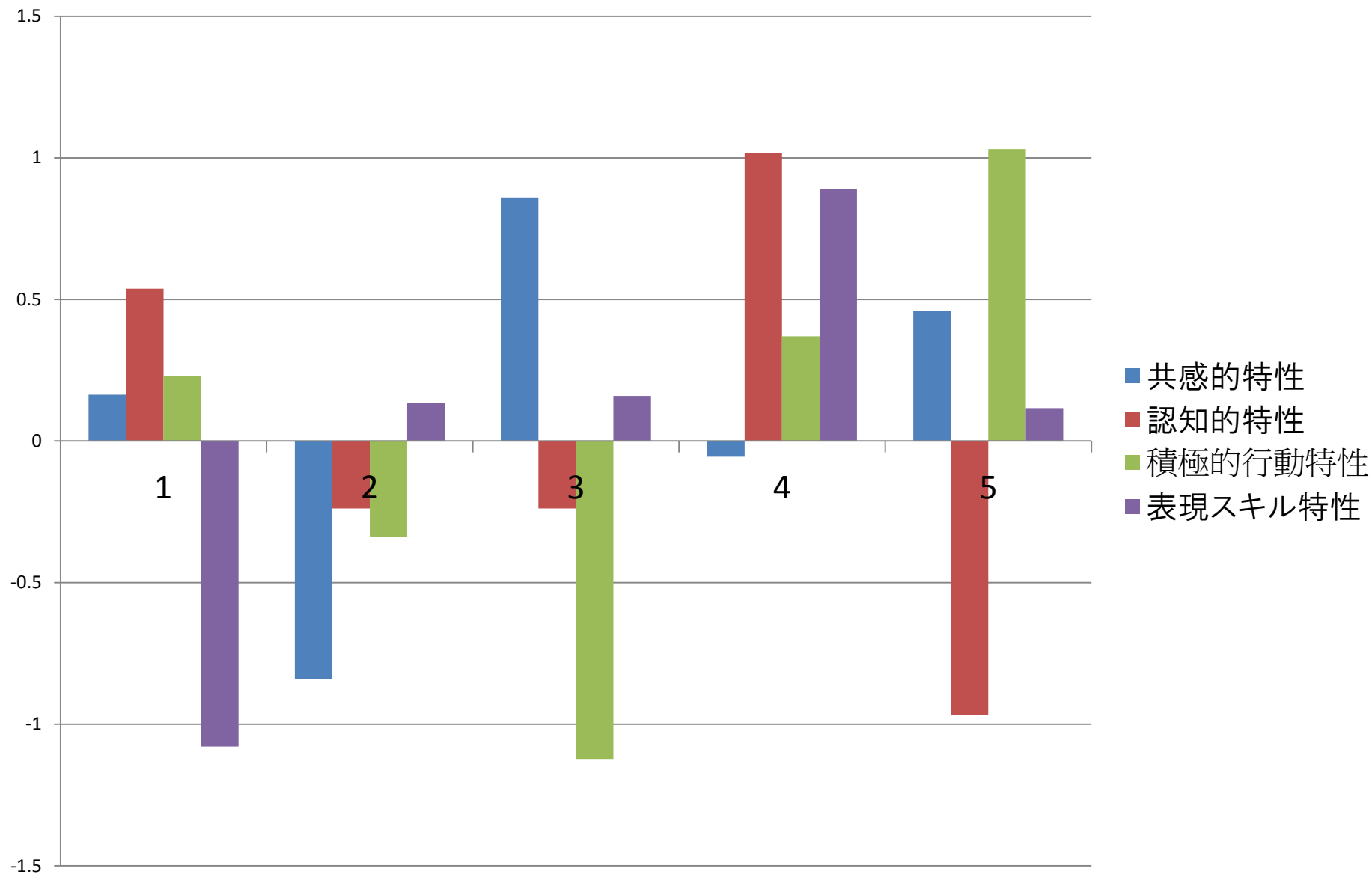
- 英語の補習授業を受講している学生の比率が最も高い
- 高校指導従順型学生がいずれの科目においても補習授業を受講する比率が高い

自主的学習の基礎が確立されていない傾向か？



2008年データよりも学習行動が消極的になっている新入生？

2013新入生の自己肯定評価によるクラスター分析結果

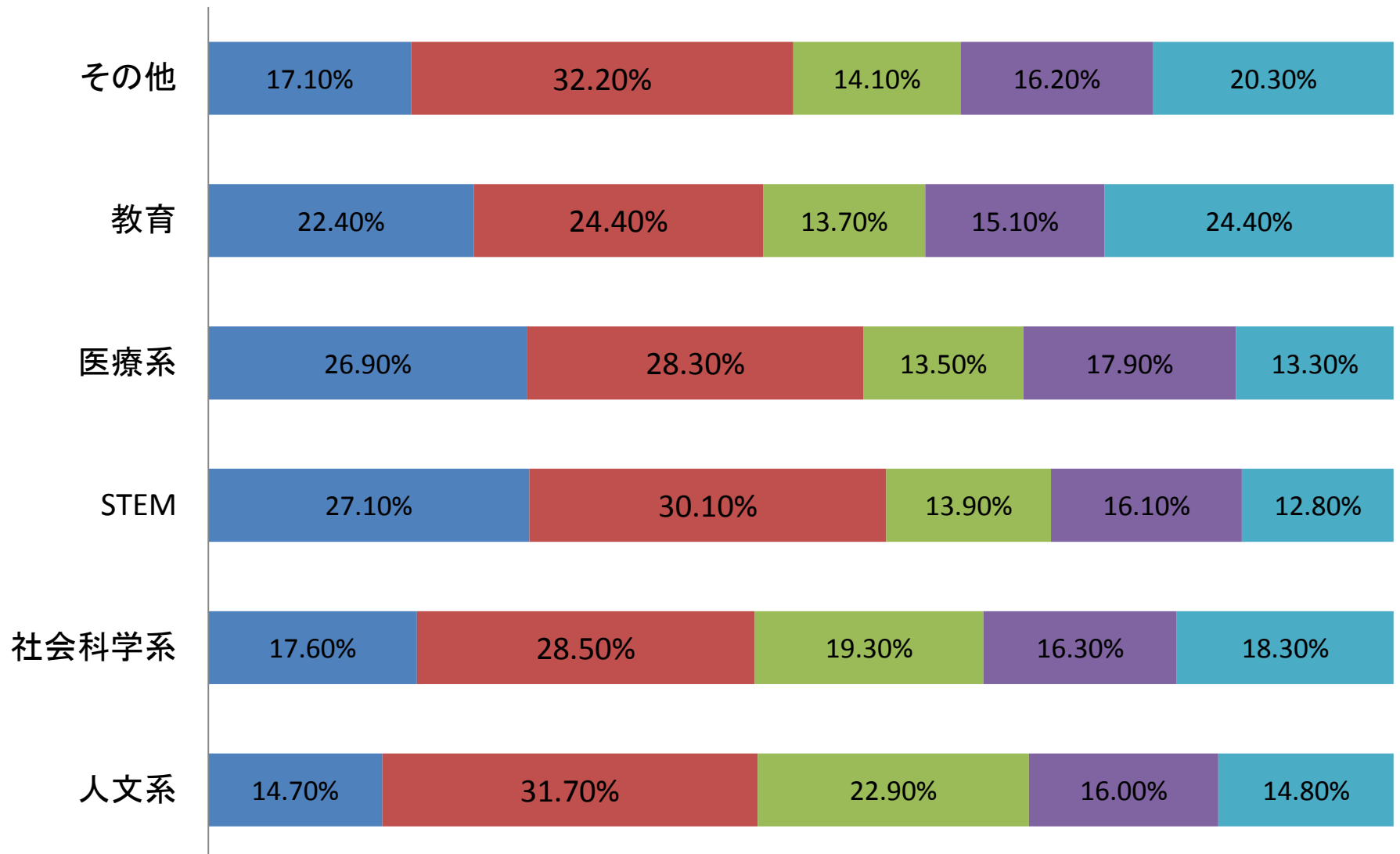


学生タイプの特徴

- タイプ1: 表現的特性に相対的に自信がない
大学での授業でプレゼンテーション,
文章表現スキルを習得すれば自信を獲得か
- タイプ2: 表現的特性のみ相対的に自信を持つ
- タイプ3: 共感的特性と表現的特性に相対的に
自信を持つ
- タイプ4: 共感的特性以外全てに相対的に自信を
持つ
- タイプ5: 認知的特性に相対的に自信がない

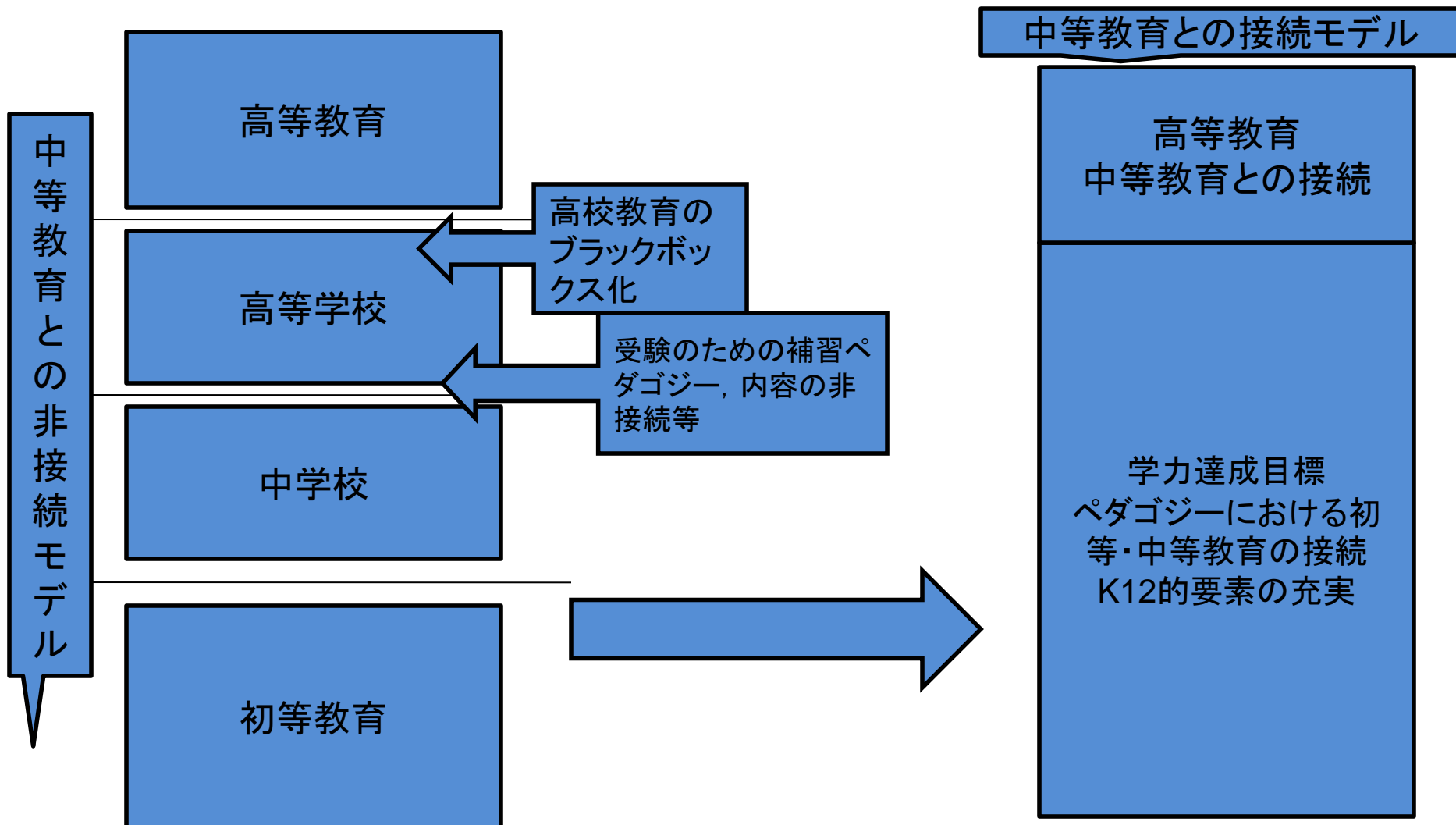
2013専攻分野と学生タイプ

■ タイプ1 ■ タイプ2 ■ タイプ3 ■ タイプ4 ■ タイプ5



日本における教育接続の問題点

非接続モデルから接続モデルへ



日本における教育接続と初年次教育

エビデンス・データからの分析(IR)からの示唆

- 中等教育との教育システムの接続というアプローチから
新テストの導入
教育方法や教授法における教育接続機能の充実
- 発達志向的アプローチから検討するという方向性
自己肯定観の確立 動機づけ
新たな初年次教育の役割か？



早期から高校生の動機付けを図り、自己肯定観を醸成することで、大学の学習への適応を円滑に促進するためには

3つの教育制度・プログラムの連携が不可欠

- ①日本版AP制度 ②入学前教育の充実 ③初年次教育

発表者へのコメント

溝上先生へのコメント

- ・ 変わる社会・進むライフコースの個人化

↓

エージェント（行為主体性）の対象

対人生 対課題 対他者（親密圏と公共圏）

公共圏でのコミュニケーションは、親密圏とは異なった方法
他者との協同学習（アクティブラーニング型授業）で磨く

疑問

- ・ 対他者 公共圏でのコミュニケーションという観点は現代だけではなく、近代でもあったはず。なぜ現在消失してしまい、必要になっているのか？
- ・ 社会学的な立場から見ると、個人という視点のみならず
社会との関わり、国際的な側面との関わりも関係しているのでは？

溝上先生へのコメント続き

- 二つのライフ(将来の見通しと理解実行)
大半の学生は将来と日常が接続していない



- 疑問 現代での社会(キャリア)の見通しについては、
アクティブ・ラーニング、キャリア教育だけでは限界がないのか？
若者支援制度、国家としてのキャリア育成支援制度など欧米が
取り入れている制度など制度面からのアプローチも必要では？
- 高大接続という視点は？
初等、中等、高等教育全体を通じての教育目標がない日本
米国のK16、APといった教育接続のない日本

知念さんへのコメント

- 「学校と社会をつなぐ調査」 パネル調査として有効
米国にもあるHigh School Beyond 調査とも共通性がある
社会としての財産のデータには成りえないのか？
- 進学レベルにおけるの共学・別学の教え方の差
古典的な教育社会学の知見 クーリング・アウト
教育社会学でのジェンダと教育研究の知見をどう取り入れるか
- 教育面での高大接続という影響は？
- 教師という姿が見えない。
高校生にとっての教師の存在あるいは教師のペダゴジーの
意味は？

ご静聴ありがとうございました。

質問はryamada@mail.doshisha.ac.jp にお願ひします